## ばない

## 思 が詰まった紅茶 歳

## コラムニスト 須賀 努

茶のお祭りに相応しい賑わいとなって 日本のお茶好きも続々と集まってき 連の様々なイベント、お茶席、セミナ-ていてよかったと思う瞬間だった。 ここで再会できたことは、茶旅をやっ れまでの茶旅で出会った多くの方々と く機会を得た。感謝したい。またこ いうセミナーで茶旅を報告させて頂 のシルクロード~万里茶路を行く』と いた。初めて参加者した筆者も『お茶 インドなど世界からの参加者があり、 など、日本のみならず、中国や台湾、 つりが静岡で開かれた。 10月下旬、 世界のお茶に出会える、まさにお 茶器販売のブースは勿論、お茶関 3年に一度の世界お茶ま 会場では茶

世界緑茶コンテストの

は深い思いと物語が込められていた。 乗り出した人だ。実はその出品茶に を見出し、 業の魏文生社長。まだ中国に現在の紅 全土の紅茶を専門に扱っている元泰茶 賞を受賞して、満面の笑みを浮かべて 授賞式で川勝静岡県知事より最高金 いたのは、 ムが訪れる前に、 他に先駆けて紅茶の販売に 中国福建省福州市で、 紅茶の可能性 中国

紅茶を作りたいという思いが芽生えた の紅茶を集めるだけでなく、 に力を入れている。そんな中で、 掘り起こし、その理解を広めること 単に紅茶が売れればよいという考えで 日本への留学経験もある魏社長は、 福州からかなり離れた山の中 紅茶の歴史や文化を丁寧に 自らの 各地

> 茶樹栽培を開始、紅茶作りが始まった。 この紅茶作りには実は魏社長の恩

飲める、 を目指している。 思いを紅茶にしたいと希望され、 福先生の思いが込められていた。 農薬などは使わず、 が真相のようだ。数々の品種を植え、 社長がそれを支えている、 らく中国で張先生の名前を知らない も呼ばれている、 師であり、 になられる張先生が、最後に自分の 人であり、 **茶業関係者はいないと言ってよい有名** 美味しいと感じられる紅茶 中国茶業界のレジェンド かつ現在数え歳107歳 福州市在住の張天 誰もが安心して というの 魏

を作り、 たことがあるらしい。新中国建国後も 中国の茶業のために尽く め、戦前の日本や台湾にも視察に訪れ 時代の混乱期に福建省に茶の実験農場 張先生は1910年生まれ、民国 品種改良、 多くの茶業人材を育てると 製茶技術の発展に努

代を過ごすが、その中でも茶の研究 る活動を行い、中国のみならず、 名誉回復された1980年以降、 文化大革命を含む20年以上不遇の時 50年代に右派とみなされる。その後 念に作られたご本を頂戴したが、 でも有名になっている。 70歳を超えていたが、多くの茶に関す を続けていたという精神力の持ち主。 100歳の記 既に



魏社長から最高金賞受賞報告を受ける張天福氏

に繋がっている。

その時は自分の足で立ち、電話で茶 葉人生』というその標題通り、 その思いが、今回の受賞茶、 輩に指示されていたのが印象的だっ 栽培についてしっかりとした口調で後 れた。4年前に一度お会いしていたが、 を訪問しようとしたタイミングであ どその日、 茶業に尽くした方である。因みにその 本は中国語で700ページにも及ぶ。 10月初め、 何と筆者も同行することを許さ 100歳を超えても尚この情熱、 その時、 福州を訪ねたが、ちょう 魏社長は張先牛 金元泰 一生を

さかお会いする機会に恵まれるなど、 客とは会わないと聞いていたので、 思う。だがさすがに現在は一般の訪問 けることが体にも良いし、ボケること ることがあるが、張先生を見ていれば、 か』など、お茶の効能について聞かれ 『きちんと作られたお茶を長く飲み続 『どんなお茶を飲めば健康になるの 元気の源だ』と言えるように

全く思いもよらないことだった。

見とれてしまった。 希望の叶った人、というのは、 またご縁を感じるものだった。車いす うな顔をするのだろうかと、 者にとっても何とも光栄なことあり、 あり、しかし慈愛に満ちたものだった。 も可愛らしく、まるで子供のようで 缶を撫ぜていた。そのしぐさは何と に座った先生はその受賞を喜んでく にその報告だったことは、日本人の筆 テストで最高金賞を受賞した、まさ 訪問した理由、それが世界緑茶コン しかもその日、魏社長が張先生を 大事そうに自らの関わったお茶の このよ

ことを願いたい 宣伝なども見られないのは何とも残 品数も減っていると聞く。また受賞茶 が集まり、 についての説明も見つからず、 緑茶コンテストについては、 3年後は世界から沢 そのストリ ーが語られる /山のお茶 事前の その出

(すが つとむ

月刊「茶」2016/12月号